キ障協　No. 46
2025年3月30日
全国キリスト教障害者団体協議会
発行人：廣　田　守　男
住　所：〒672-8045
姫路市飾磨区中野田4-116-38
電　話：079-235-8819
印　刷：リブウェル聖恵
（価格　一部50円）
郵便振替口座 00110−7−688014
加入者名：全国キリスト教障害者団体協議会

修養会主題

「キリストに在って愛し、支え合う共同体をめざし、この社会に生きる」

パネルディスカッション発題①

日本盲人キリスト教伝道協議会副議長
阿佐　光也

1．はじめに

みなさんこんにちは。もう何ヶ月か前になりますが、山崎勇治さんより突然お電話をいただき、「先生、一生のお願いがあるから、断らないで下さい」と言われました。

私は何事かとびっくりしましたが、そのお願いが、この集会でお話をすることでした。

山崎さんとは四〇年間、日本盲人キリスト教伝道協議会において、共に働いてきた仲間ですから、一生のお願いでなくても、日程さえ空いていれば、お断りはできないことですが、日程が空いてなくても、無理にでも空けて来てください、という意味だったのかも知れません。

私としては、今日のテーマにそってどれ程のお話ができるか、ちょっと心もとないのですが、自分の歩みを許された時間でお話ししたいと思います。

その前に聖書をヨハネの手紙一四章九節をお読みします。

「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。」

2．私の生い立ち

私は一九四七（昭和二二）年六月三〇日の生まれです。

昨日七七歳になりました。これは喜寿というそうですが、そんな年になっています。

私の生い立ちには、日本の一般的な家庭の子どもと比べて、二つの大きな、相違点、あるいは特徴があります。

その一つは、両親がクリスチャンであるということ。

そして、もう一つが、父親が全盲の視覚障がい者であるということです。

そして、その二つの特徴は、やはり私の人生に大きな影響を与えてきたということを、今この年になって強く感じています。

ということで、ごく簡単に私の生い立ちからお話しします。

私の父は一九二二（大正一一）年に徳島県の山奥、祖谷地方の部落で生まれました。

そして、五歳の時に怪我で失明します。

父は、昭和一二年に官立東京盲学校中学部に入学して、一人で東京に出てきて、キリスト教と出会いました。

盲学校の近くにルーテル教会があり、この教会は村上義忠という盲人牧師が伝

道していて、そこには当時では珍しい沢山の点字の本が揃えてありました。父は、その本を読みたくて、最初は教会に通いました。

その図書の多くは、戦前の「日本盲人キリスト信仰会」という盲人クリスチャンたちが出版した、大人の読むキリスト教の図書が殆どで、父はそういう本を片っ端から読んだそうです。

しかし、村上牧師は、交通事故で亡くなって、父は受洗まではいきませんでした。

こうして、父は戦時中の一九四四年に師範部を卒業して、岡山盲学校の教師として赴任します。

この岡山で、熱心なクリスチャンであった、母と出会い、母の母教会である日本イエス・キリスト教団岡南教会で受洗、一九四六年に結婚して、一九四七年に私が産まれます。

私が産まれると、すぐに、父は東京の母校である官立東京盲学校に転任するよう辞令が来ましたので、九月に慌ただしく、母と生まれてまだ二カ月ちょっとの私を連れて東京に出てきたのであります。

戦後間もない昭和二二年の東京は焼け野原で、住む家などありませんから、私たち一家は、盲学校の中の教室を仕切ったような部屋を与えられて、住み始め、その後は物置として使っている建物の二階で暮らしたのであります。

盲学校の中には、私たち一家だけでなく、空襲で家を失った教員や事務員も沢山住んでいました。その家庭の子どもたちも沢山いて、私は盲学校の中で楽しい子ども時代を過ごしました。

そういう訳で私は赤ん坊の時から盲学校を我が家として、生活をしたのであります。

そして、中学一年生の時、昭和三五年ですが、国家公務員住宅が初めて建てられ、２ＤＫの狭い集合住宅でしたが、わが家は、やっと人並みの家に住むようになりました。

家の中にトイレがある生活に感激した覚えがあります。

これが私の生い立ちです。

その一番の特徴は、中学一年生まで盲学校の中に住んでいた、ということです。

私は小さい時から、父の手引きをして、かなりの場所に行っていましたから、いろんな視覚障がい者の方と出会い、また、視覚障がい者の世界を見ながら育ったのでした。

また私は、幼児の頃から父の手引きをしていましたから、何一つ全く取り柄のない私ですが、視覚障がい者の手引きだけは、誰にも負けない、そんなことを勝手に思っています。

しかし、私には忘れられない出来事があります。

それは、中学生の時で、父と一緒に、都電に乗って、私は通学、父は通勤をしていた時のことです。

王子駅という都電の乗換駅で、反対側に乗るべき電車が来たので、急ごうとして、つい父を柱にぶつけてしまったことがありました。

その時、父は何も言いませんでしたが、痛かっただろうと思います。

その父の痛みが、私の痛みとなって、私は今でもその時のことが忘れられません。

その後、私は学校を卒業して、貿易会社でサラリーマンをしていましたが、

三〇歳を過ぎたあたりから、両親の宗教であるキリスト教にやっと興味を持つようになり、それが高じて、とうとう三六歳の時に、夜間の神学校「日本聖書神学校」に入学することになりました。

そこで、会社に勤めながら通学するのは全く無理なので、会社を辞めて、夜間神学校に通える昼間の仕事を探さねばと思っていたときに、父の関係していた日本盲人キリスト教伝道協議会（通称・盲伝）の主事の方がちょうどお辞めになるということで、次の主事を探していたのであります。

私は、盲人には慣れていますし、盲伝の修養会に子ども時代に父親に連れられて行っていたこともあり、また、点字の読み書きもできましたので、主事として、雇っていただいて、三六から六〇歳まで、二四年間主事として、働いたのであります。

私は盲伝で多くの盲人たちと共に働くことになって、感じたことは、自分はふるさとに帰って来たな、ということでした。

やはり盲学校が私のふるさとで、私は盲伝が楽しくてしょうがなかったのです。

ですから、神学校を四〇歳で卒業して、日本基督教団新泉教会の牧師となりましたが、とても主事を辞めることはできず、また、辞める気も全然なかったので、牧師をしながら、主事の仕事を続け、今は副議長という形で関わっています。

これが、おおまかな私の生い立ちであり、素性でありまして、三六歳から盲伝と共に歩んでいるのであります。

3．日本盲人キリスト教伝道協議会（盲伝）のこと

ここからは、盲伝についてお話しします。

盲伝は今年で創立七三年目となりますが、盲伝が創設される切っ掛けは、戦後、一九四八（昭和二三）年にアメリカからヘレン・ケラーが二度目の来日をしたことであります。

私は、盲伝の生みの親は、間違いなくヘレン・ケラーだと思っています。

つまり、盲人伝道協議会は、ヘレン・ケラーの日本における遺産なのです。

敗戦後の日本を訪れたヘレンは、視覚障害者が大変悲惨な生活をしていることに心を痛め、彼女が総裁をしているアメリカの盲人伝道団体のジョン・ミルトン・ソサエティーから、日本の盲人たちへ援助をしようという申し出をしてくれたのであります。

そして、その援助金を受け取って管理し、日本の盲人たちや盲人団体に配分するために、日本にも盲人伝道団体を作ろうということになりました。

その母体になったのが、大正時代から活動していた、先ほどもちょっと触れました「日本盲人キリスト信仰会」という盲人クリスチャンたちの集団でした。

そこで、活動している指導的立場にある盲人たちに、日本基督教団とＮＣＣ（日本キリスト教協議会）から委員が派遣されて準備が進められ、一九五一年に盲伝は発足したのです。

その時の盲人メンバーの名前をちょっとご紹介します。

皆さんにはあまり馴染みのない名前かも知れませんが、私たちにとっては、すごい先輩がここに集っているのであります。

まず、日本盲人の父と呼ばれている好本督がいます。

この人からすべてが始まったのです。

好本は生来の弱視で後に失明しますが、内村鑑三と親交を結び、東京商工（今の一橋大学）を出た後オックスフォード大に学び、当地で貿易商社を起こして、その収益をすべて日本の盲人福祉と盲人伝道に献げた人です。

この好本の援助で、全盲で初めて英国に留学し、点字新聞『点字毎日』の初代主筆となった中村京太郎、日本で最初に関西学院大に学び牧師となった熊谷鉄太郎、ヘレン・ケラーの親友で大阪ライトハウスを創設した岩橋武夫、点字雑誌『信仰』を創刊して、旧約聖書の点字出版、盲人の救護施設「東京光の家」を創設した秋元梅吉、日本点字図書館を設立した本間一夫、点字旧約聖書を製版した伊藤福七、東京点字出版所を作った肥後基一、盲人牧師として活躍した佐藤和興、大村善永、石松量蔵、そして、信愛ホームを設立して鍼治療と信仰を教え、多くの若者に生きる道を与えた平方龍男、などの人々です。

私は盲伝の主事になって、こうした、盲伝を創設した盲人たちの信仰や歴史を自伝や評伝などで知って、本当にビックリしたことを今も覚えています。

そこには世界で例を見ない盲人たち自身による、驚くべき活動や事業が幾つもあるのです。

つまり、私からすれば、とんでもない働きをした盲人たちが明治から昭和にかけて沢山存在していて、そのほとんどがクリスチャンだったのです。

この人たちによって、つまり、当事者によって、日本の盲人の福祉や、文化や、教育がなされてきたのでした。

そこに共通することは、彼らが盲人同胞の幸せをひたすら願って祈り、しゃにむに働いたということです。

こういう人々のことを沢山語りたいのですが、今日の私に与えられた時間は約三〇分ということで、その中の一人、秋元梅吉について少しお話し致します。

4．秋元梅吉

盲人伝道協議会では、機関誌として、月刊点字雑誌『信仰』を毎月発行していまして、この七月号は通巻一二四五号となっています。

この雑誌『信仰』の創刊が一九一五（大正四）年で、この雑誌を創刊したのが当時盲学校の学生だった秋元梅吉なのです。

それ以来、一〇九年間、この点字雑誌は戦時中でさえ一回も休むことなく、主筆はすべて盲人が担って、発行され続けているのです。

これだけでも世界では例を見ないことだと思います。

秋元梅吉は明治二五年、中野に生まれ、一四歳の時に官立東京盲学校に入学しますが、ここで聖書に出会い、熱心なクリスチャンになり、内村鑑三の聖書集会に通うようになりました。

そこで、キリスト教こそ、盲人にとって希望の光、生きる力となると信じた秋元は、盲学校の住所の土地の名前をつけて、「雑司ヶ谷信光会」という会を作って、伝道活動を始めます。

そこで、発行したのが雑誌『信仰』でした。

彼は大正五年師範部を卒業します。

ここを卒業した者はいわばエリートで、クラスメイトはみな地方の盲学校の教員となって、東京を去っていったのですが、秋元は就職せずに東京に残ったのであります。

当時の盲人たちの多くは、生活に追われ、苦しんでいる。それらの仲間にも光が与えられるのでなければ、自分だけぬくぬくと安逸な生活を送っても、心は休まらない。

秋元はそういう思いが強かったのです。

それ以来、彼は盲人同胞のために、雑誌の発行、点字図書の出版、そして、総合的な盲人福祉施設「東京光の家」の創設など、驚くべき働きを多岐にわたっておこなうのであります。

そこには、数々のエピソードや逸話が残されていますが、その一つに、点字旧約聖書の発行というのがあります。

当時は、点字の新約聖書はありましたが、旧約聖書はありませんでした。

秋元は、旧約聖書も自分で読みたいと、自分のための旧約聖書を自分で作ります。

彼は人に聖書を読んでもらって、自分で点字を一点一点打って苦労して二〇数冊に及ぶ点字旧約聖書を作りました。

秋元は、これを読んで、大変喜んだのですが、その喜びは盲人仲間みんなにこれを読んで欲しいとの切なる願いに変わりました。

そこで、点字旧約聖書の発行を求めて、当時の聖書協会に掛け合いますが、取り合ってもらえません。

秋元は、それなら自分たちで点字旧約聖書を発行しようと決心して、突然に友人の伊藤福七という仲間の盲人クリスチャンに「どうだ、伊藤君、聖書のために死なないか」と、点字旧約聖書の製版を頼んだのです。

すると、伊藤福七は並々ならぬ秋元の決意に動かされて、また、本当に聖書のためなら死んでもいいと思って、それを引き受けたのであります。

大正一一（一九二二）年八月初めのことです。

点字の製版とは、二枚重ねの亜鉛板に点字を刻印する作業で、当時の点字製版作業は本当に命がけの仕事でした。

この時のことを伊藤はこのように言っています。

「私はどの一字によって盲人が信仰を起こすかも知れないと思いましたので、一点一点祈りながら打って参りました。」

そして、大正一三年一二月二二日に点字旧約聖書全巻が完成、翌二三日に、仲間たち三〇数名が集まって、点字旧約聖書完成の感謝会が開かれました。

この会には内村鑑三も出席して、新しくできた二三冊の旧約聖書の上に手を置き、あつい祈りを献げ、出席した関係者はみな感涙にむせんだといいます。

こうして点字の旧約聖書が完成しました。

新旧約聖書全巻の点字出版は世界でイギリスに続いて二番目でした。

但し、盲人自身の手でそれがなされたというのは、世界で例がありません。そういう、若き盲人たちが、福音に生かされ、情熱を燃やしたという歴史が、大正、昭和の時代だったのです。

こうした秋元の逸話はいくつもあるのですが、秋元は、その後、先ほども言いましたが、「東京光の家」という盲人の総合福祉施設を創立しました。

これが秋元の念願だったのです。

この「東京光の家」の五〇周年の記念誌に秋元は次のような言葉を記しています。

「私は今も盲人であるし、五〇年前も盲人であった。こんな私が、ある日、内

村鑑三先生との出会いにより、聖書の神を信ずる人となった。これを境に私は、一変してしまった。古い私は死に、新しい私が誕生した。不平と不満の私は死に、希望と感謝の私が生まれた。内村鑑三先生からキリストの信仰を学ぶことにより、私の人生観は一八〇度の転換をした。私自身のことは、すべて解決され、私は否応なく自己以外のことに目を向けさせられた。」

障害者への偏見と差別の渦巻く大正から昭和初期の時代、福祉の恩恵などほとんどないこの時代に、全盲の秋元は、聖書の神を知って、「私自身のことは、すべて解決され、私は否応なく自己以外のことに目を向けさせられた」と語っているのです。

秋元は聖書の神を知って、あるいは、イエス・キリストの福音によって、いったい自分の何が解決されるというのでしょうか。

自分の目が見えないという現実も、貧しい自分の境遇も、何一つ解決されるわけではありません。

でも、秋元は、「自分自身のことは、すべて解決された」と言うのです。いったい何が解決されたのでしょうか。

それこそが、聖書が人間に問いかけている「罪」の問題だったのです。

秋元は、このようにも言っています。

「まことに『キリスト・イエスは罪人を救うために世に来給うた』という言は信ずべく、また無条件に承認さるべきである。そしてこの私がその罪人の第一人者である。」

今日は、ヨハネの手紙一四章の九節を最初に読みました。

「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです」と記されています。

私たちは、この世に生まれて、既に生きています。

その既に生きている私たちが、「その方によって生きるようになる」とは、どういうことでしょうか。

それこそが、秋元の言う「私自身のことは、すべて解決され、私は否応なく自己以外のことに目を向けさせられた」ということではないでしょうか。

最近よく「承認欲求」という言葉を聞きますが、私たちは主イエスの福音によって神さまから百パーセント承認されている、誰も彼もが愛され承認されているのです。

その安心の中で生きるのが信仰者なのだと思います。

そして、これこそが、今回のテーマ「キリストに在って愛し、支え合う共同体をめざし、この社会に生きる」ことに通じていると信じるのであります。

（日本基督教団　隠退教師）

パネルディスカッション発題②

日本基督教団高田教会　主任担任教師
横内　純

松本筑摩野伝道所、また信州なずなの会に招かれた事、心より神に感謝したいと思います。松本筑摩野伝道所と関わりの深い松本教会には二〇二二年の秋から冬へと移る時に訪れました。当時は日本聖書神学校の四年生となっていてほぼ月に一回程度、各教会での説教奉仕をさせて頂いておりました。昼に働いて夜神学を学ぶという特質から一日が大変濃密な

時間となっていたのを覚えております。
それらを今思い起こしてみると、神との新しい出会いが幾つかありました。

一つ目は私自身がキリスト者となったとき、受洗したときです。
二〇〇七年の一二月二三日洗礼式を礼拝の中で家族と共に執行して頂いたことを覚えています。当時は高校二年生、野球も平日、休日問わず部活として、していましたので、教会に足を運ぶことというのが少なかった時でもありました。野球といっても決して上手というのではなく、他の部員達に支えられながら、私自身身体の障害がございますので、何とか身体を動かすことが出来ていたという状態でもありました。部活をしながら年に数回休みがあるか無いかの時に教会へ行っていました。これも今にして思い起こすとやはり神様が教会へ私を招いて下さっていたのではないか、と思うのです。高校、大学生の時に家族を天に送りながらも松本教会や上田新参町教会へ導かれていたことを主に感謝させて頂きたいのです。高校や大学、神学校での学びがあったわけですが、学生の務めは学ぶことであると思っていた所がございましたので、学生の間は限られた時間の中で何を学び、知っていくのかを意識していたように思います。
しかし学生であった時も決して満たされていたわけではありません。特に家族が天に召されていったときは大きく動揺しました。今まで一緒に暮らしていた家族がいなくなるからですが、しかしそこで神は見離される方では無かったのです。勉強と仕事、人との関わりの中に主はおられたのです。一つ目の神との出会い、これを私は学びの途上において経験し、その後の日々を歩むことが出来たのです。神との出会いという恵み、これが与えられた事を主に感謝致します。

二つ目の神様との出会いは日本聖書神学校に入学した時です。日本聖書神学校に入学する前の一年間は松本教会の先生にご相談させて頂いたり、家族の中でも話し合ったり、仕事を松本でしながら神学校の情報というのを入手していた時期でありました。東京にある神学校にはほぼ毎月、何らかの学校行事の際に訪れたり、試験の勉強をする中で神からの召命が与えられたと、信じ、過ごしたりしました。この召命は神学校に入学した時だけではなく、補教師試験の際にも何故日本基督教団の教師と為るかという面接でも問われたことでもありますし、二〇二五年度の秋に受ける正教師試験でも再び問われることとなるでしょう。問われたときに、きちんと日本基督教団の信仰告白をしつつ教憲・教規を守りながら聖礼典を執り行い、主の愛に感謝して、教会員と共に支え合いながら日々の仕事をして参りたいと特に教区の面接で言えるように備えてゆきたいと思います。
神学校在学中は幾つかの仕事を日中経験しながら、夜勉強をしていました。一年目は福祉財団の施設の清掃作業、二年目、三年目は有料老人ホームでの介護補助業務、四年目が目白教会の教会事務とそれぞれ仕事をしていました。一年目に働いた福祉財団の清掃作業ですが、五階建の階段を全て清掃し、貯水場や廊下も綺麗にするというような仕事で在りましたが、とてもではありませんでしたが身体障害をもつ人間にとっては困難な仕事でした。片手片足一本で五階建の階段を

上り下りしていたら二カ月目には身体を崩し、二年目までは他の仕事をすることなどとてもできませんでした。それでも夜の神学の勉強は同級生と語りあいながらできたので、神様に感謝です。一年が過ぎるころには学校にも慣れ、体調は回復に向かっていました。二年目、三年目は有料老人ホームでの介護補助業務をしていたと言わせて頂きましたが、目白にある有料老人ホームでした。社会福祉士の資格があったから採用ということになりました。介護補助業務は簡単な清掃作業、利用者の見守り、食事介助といったものでした。どれも片手でできる作業の範囲であったので二年間続けることができました。

神学校の方は二年目、三年目ということで聖書の学びやキリスト教の歴史だったり、釈義や説教の仕方などを学んでいました。また四年間で実習教会が巣鴨ときわ教会と目白教会それぞれ二年ずつ毎週日曜日に実習で教会を訪れ学びをすることができました。二〇二〇年からはコロナが蔓延しつつある時期でもあって東京教区の北支区内の教会でも集まっての礼拝をしない教会もあったわけですが、巣鴨ときわ教会と目白教会は極力会堂で礼拝をするという方針の下で動いていた教会で在りました。どちらも同じ北支区の教会ですが主が働かれて行なわれていたことを思い起こします。四年目からは目白教会の教会事務の仕事が与えられました。朝出勤して教会の付帯施設の幼稚園で職員さん達と朝礼をして、教会に戻って週報を作ったり、教会に来た方の応対、名簿の整理等したりしていました。一日の終わりには日報を書き、牧師に報告して退勤しました。特に四年生の時は仕事と卒業論文、補教師の試験勉強、月一回の各教会での説教奉仕など同時にしつつ、夜は勉強をしている中で学校で学べるのは今しかない、主が用意された、その想いで続けていたのだと思うのです。この四年間の学びの時に確かに主がおられ、歩まれたのです。短くも大変濃い四年間を過ごさせていただいたこと、先生方や神学生達、各教会との交わりに加えられたことと、入学から卒業まで神が導き、働いて下さっていたことを主に感謝させて頂きたいと思うのです。

三つ目の神との出会いは神学校の卒業後、高田教会と新井教会は代務者として教会に遣わされ仕事を始める事ができたときです。招いて下さったのは主であり、教会の皆様で在りました。元々、都内だけではなくやはり視野を広げて全国各地の教会に遣わされてゆきたいという意思は神学校にも示していましたので、上越市の高田教会に遣わされたのは喜びに満ちた出来ごとであったわけです。

高田教会は昨年度、創立記念礼拝を執り行い、創立一三三周年を迎え、妙高の地で創立一一六年を経過する新井教会と同じく新潟地区にある二つだけの旧メソジストの教会として歩んできた歴史があります。また御存知である方々もおられるかもしれませんけれども、上越市や妙高市は豪雪地域でもあったことから昨年度は、夏は草取りや冬は除雪作業をできる範囲でさせて頂いたのを覚えています。二〇二一年度は高田教会の隣の民家が倒れてきて、教会と連なる牧師館の壁が崩れたり、屋根が崩落したりと被害があったわけですが、地区の教会の皆様の祈りと献金によって修繕され、建っています。それでも屋根が落ちた下にある生活空間は出入りしないようにしながら生

活をしているわけですが、守られて暮らすことが出来ているのは神に感謝なのです。

礼拝はおよそ一〇～一三人程が集い、毎週執り行っております。伝道師でありますので聖礼典は執行出来ておりませんが、同じ神学校を数年前卒業されている新潟地区にある栃尾教会の先生や交換講壇で来られる先生方に聖餐式を執行して頂くように動いています。このように礼拝に関わる仕事をできている、ということと教会員が天に召されてゆく時も昨年度はございました。高田教会では三人、新井教会ではお一人、召されてゆきました。礼拝の奏楽中に召されていかれた姉妹もおられる中で四人の方々の葬儀・告別式を執り行いつつ、お二人の納骨式を無事執行出来たことを本当に神に感謝させて頂きたいのです。御元にゆかれた姉妹方の平安と残された御遺族の皆様に主の慰めが与えられる事を祈ることが出来たのです。このように主を信じる方々がおられる二つの教会で働きが少しでもできているならば、これに勝る喜びは無いのです。神は皆と共に生き、そして私はお一人お一人を通して、神と出会ったのです。

これからも私がする働きは決して十分なものではないかもしれません。教会におられた先生方と同じようにはできないかもしれません。しかし主が、教会の皆様が高田教会、新井教会に招いて下さったこと、そして共に過ごす喜びを、学びを与えて下さっていることに感謝して日々の仕事をしてゆきたいと信じ、願うのです。

パネルディスカッション発題③

「私のねがい」

日本同盟基督教団　伊那聖書教会
北原　学人

私は現在、不登校引きこもりを支援するＮＰＯの通信制高校で、マンツーマン授業を行っています。数年前、足に先天性の障害を持つ生徒に理科を教えていたことがありました。その生徒が、卒業後引きこもってしまったので、支援のためにメールのやりとりを始めました。

最近その生徒から、こんなメールが届きました。「先生、このまま死なないでいられる自信がないです」

私はどう返信してよいかわかりませんでした。

彼女は、小さい頃から家族の中で、障害のために嫌がらせを受けていて、ギクシャクした関係の中で育ってきたようでした。学校に行っても、露骨に嫌がらせを受けることがあり、いつしか常に反抗的な色眼鏡で周囲を見るようになったようでした。周囲の人に対する恐れとひねくれてしまった性格の自分を責め、いつしか心がぼろぼろになって疲れきってしまっていたのかもしれません。今は引きこもっている中で、時折好きな舞台やコンサートに出かけることで、心のエネルギーを補充しているようでした。

心に平安とふつふつ湧き出るようなエネルギーの泉が欲しい。きっとそのような思いをしているのではないでしょうか。

しかしそれは彼女だけの問題ではありません。私も同じ思いをした経験があるのです。大学時代の私も「死なないでいる自信がない」という思いを抱えていま

した。そのため好きなこと元気が出ることを求めて、履修出来ない授業にもぐり込んで講義を聞いたり、恋愛に没頭したり、大学祭の実行委員に加わったりとさまよっていました。あるとき一九六〇年代以降ずっと大学闘争を継続して闘っている元大学教授たちと知り合い、個々の人間の関係を止揚して真理を見いだすという変わった活動にも没入しました。しかし自己実現と哲学的な努力によって救われようとしても、結局得られるものは、平安よりもストレスを増していくだけのように思えました。

大学卒業後中学校に勤務しましたが、夢みた職業であったのにも関わらず、半年も経たぬうちにダウンして入院せざるを得ませんでした。自分を守るべき白血球が自分を攻撃してしまうという難病がストレスのために進行してしまい、大腸から多量に出血し出したのです。手術をして一段落したと思ったら、続けて今度は両股関節が激しい痛みとともにくっついて棒のように動かなくなってしまいました。立つことも歩くことも出来なくなったのです。まだ二〇代という人生を謳歌する青春時代のまっただ中で、ただ死を待つだけの暗黒の人生になってしまったと悟った時、精神的なショックはまさに絶望というものでした。

入院中お互いに励ましあっていた同級生が亡くなったとその子のお母さんがわざわざ伝えに来てくれた時も、私は心の中で「あなたの娘さんは、早く死ぬことが出来てよかったですね」とつぶやいていました。「病院の屋上から飛び降りるかもしれない」と心配をして明るく声をかけてくれる看護師さんたちの優しさも通じませんでした。毎日遠く離れた実家から付き添いのためにすすんで来てくれていた母親にも、感謝の気持ちさえ持つことが出来ませんでした。私も心にトゲを立てて、不幸になった責任を周囲になすりつけては自分の心に平安を得ようとしていたのでした。

障害をもつということは、第一に自分の将来についての恐れや不安な幻想との戦いであると言えるのかもしれません。

私はその後、医師から「一〇年程度しかもたないかもしれないが、人工股関節を入れるという選択肢もある」と伝えられて手術を受けることにしました。退院後マンツーマンの学習塾を始め、やがて不登校や引きこもりの支援にも手探りで関わるようになりました。社会に出て改めて感じたことは、世の中にはお金を得るという価値観以外に生きる目的がないということでした。しかも自分の心の貪欲をコントロールしながら生きていくことは難しく、生きれば生きるほど心が汚れて行くのを感じました。

そんな頃、大学時代のあまり親しくなかった友人から、一〇年ぶりに突然暑中見舞いが届きました。洗礼を受けてクリスチャンになったという友人は、卒業後病気で苦しんでいた私のことを伝え聞いて、思い出してくれたようでした。私が返信をするととても喜んでくれ、教会で行われる自分の結婚式に招待してくれました。あまり親しくないことに戸惑いながらも東北での結婚式に出かけて行って、翌日には初めて礼拝に参加しました。

礼拝後の信徒さんとの交わりの中で「聖書には真理が書かれている」と教えていただきました。私はその真理をぜひ知りたいと思い、地元に帰ってきてから教会を探して集うようになりました。

ある日、牧師さんが説教の中で「私た

ちは罪に縛られている。そこから抜け出すには死んで抜け出すしかない。そしてイエス様がその初穂となって下さった」と語られました。私は自分の長年の苦しみの正体を、初めて知らされた思いがしました。無意識のうちに自分を縛り上げて、息を絶えさせている罪の縄目から死んでよみがえる事が必要だったのだと気づかされたのです。私は洗礼を受けてよみがえり、イエス様と共に歩む道を選びました。

改めて思い返してみると、私のこれまでの歩みには、主の導きがなんと大きかったことかと思わざるを得ません。

今私とメールのやりとりをしている生徒にも、私のような神様の導きが与えられているだろうかと思わされます。

彼女の話を聞いていると、障害を持っているからといって、周囲に愛が生まれるとは限らないと思わされます。障害を持つということは、周囲から自分へと向けられるまなざしとの戦いであり、加えてこの世界での物理的・経済的な生きにくさとの戦いでもあります。もし周囲に理解者や支援者が少なければ、その戦いは苛酷なものとならざるを得ないと思います。

しかしそんな私たちに、天の神様は使命を与えてくださっていると思うのです。そして神様は助け手としてイエス様を与えてくださっていると思うのです。私たちがしっかりとイエス様につながって、イエス様とともに喜びに満たされつつ精一杯生きることを通してイエス様が働いて下さり、私たちの周囲に温かな愛の心が広がっていくのではないかと私は思うのです。

今は心をハリネズミのようにしてエネルギーをすり減らして絶望の淵を見つめている彼女にも、いつかキリストに結びあわされて、心に喜びと平安と愛の泉が湧き出るキリスト者になってほしいと願っています。

パネルディスカッション発題④

のぞみカウンセリング代表
信州なずなの会会長
上村　聡美

わたしは現在発達障がい当事者を中心にした自助会を月一のペースで開催しています。最初の茶話会からすでに二〇年あまりたっていますが、当事者をめぐる環境は、ゆっくりと確実に変化していると感じることがしばしばです。保護法ができた、偏見差別が表向き禁止された、就職しやすくなった、普通にお店が利用しやすくなったなど。人の気持ちがおいついているかどうかはともかくです。

基盤はわたしの育ちにあるのですが、少しずつ思い出していく中で神様は長い時間をかけてわたしから神様への信頼を育んでくださっていたことに気づかされ、あらためて深い畏敬の念を呼び起こしているこのごろです。

わたしの父は貧しい水のみ百姓の八人兄弟の末っ子として茨城の僻地に育っています。母は秋田の豪農の跡取り娘として「蝶よ花よ」と育った世間知らずです。これだけ聞いても、この結婚はありえない！　とわたしは思ってしまうのですが、みなさんいかがでしょうか。

父は母曰く大変な美青年だったらしいのですが、口八丁でしたから母はすっかりのぼせ上って、一族の反対を押し切ってすべてを捨てて東京まで父に言われるままに逃げてきたようです。一緒に住み

始めてようやく父の異常さに気づいて別れようと思った時には、わたしがおなかにいたため、すべてを呑み込んでしまったとのこと、昭和三〇年代はそういう時代だったらしいですが、このことがその後ずっと尾を引いて幼いわたしへの虐待へとつながっていくのです。

父は発達障害をにおわせる特性をいくつも持っていて、子どもの頃から生きづらかったようですが、おそらく祖母の系列から代々引き継がれているのかもしれません。発達障害は男性に多く見られ、遺伝性もあるようです。どこどこの研究員だ、芸能人だ、政治家だ、風来坊だといった親族がいたら可能性はぐんと高くなります。

たまに外見に特異性が現れることもあり、うんと食べているのにモデル体型変わらず、すこぶる美形か異様に目が鋭いなど、一般的には少数派です。

わたしは父の特性をしっかり受け継ぎ、保育園児の頃には異変が現れていたようで、いち早く気づいた保育士から専門家に診せるよう打診があったものの、見栄っ張りな父はすべてもみ消していたようです。

父はコミュニケーション力に問題があって、うまく言いたいことが伝わらないと、暴力に変える人でした。自己本位で融通が利かない、他人の傷みが理解しにくい、空気が読めない、無鉄砲、破天荒、ルールが守れず何度も警察から指導を受ける、精神的未熟さや注意欠如もみうけられました。ただし発想力と行動力はすばらしい、ペットは動くおもちゃなので、飽きたら山に捨てに行くを繰り返していました。私自身は中学生までぬいぐるみと生体の区別がつかず、小動物を虐待していました。

二人の当事者を抱えた母はどれだけしんどかったでしょう。発達障害のはの字もなく、夫婦喧嘩は痴話話、虐待は教育に置き換えられてましたし、身体障がい者はバス乗車を普通に拒否されていた時代です。精神医療はきちがい病院と父はよく揶揄してました。

はるか何一〇年も前の話で記憶が薄れているのですが、思い出したことがあります。母から髪をわしづかみにされて頭を風呂桶に沈められた時、わたしは水の中で息ができたし、鼻はきゅっと閉じたので一滴も水を飲まなかったのです・布団をかぶせられた時も必ず口の周りに空間ができていたので余裕で息ができたし、目の前にまるでライトを当てられたように光がともっていてまぶしかったうえに、まるで抱きかかえられるように暖かったので、安心できました。壁に投げつけられた時はすぐに失神したので、母はそれ以上に何もできなかったなど、かようなことでわたしは生き延びたんです。

ダニエル書にダニエルたちが生きたまま燃え盛る炉に投げ入れられたのに、やけど一つ負わなかったシーンを読んだ時、このことを思い出しました。エリアさんが天から火を呼び起こせたのも、神様が働かれたからできたんです。

実は神様にはこのほかにも幾度か助けられています。中学生のころ、横溝正史ブームのまっただ中で、ちまたでは話題沸騰中だったこともあり、わたしは感化されて両親を殺そうと包丁を研いだことがありました。「今夜殺してやる」と心の中で意気込んでいたその時に、「おまえはこんなことで人生をだいなしにするのか」という声が響いた瞬間に、はーっと深く息を吐いたら何かが体から抜けて

いくのを感じたのです。それ以降二度と親を殺したいと思わなくなりました。誰のところにどのような奇跡がおこされるかは主が考えお決めになることです。人が勝手に今の時代に奇跡はいらぬなどと、言えるものではないと、あらためて思いますがおかしいですか？

イエス様を初めて知ったのは一〇歳の時でした。学校の図書館でイエス・キリストの伝記を見つけた時です。「愛」という単語に過剰反応して思わず手を合わせて「神様」と天に向かってつぶやいていました。「神様に会いたい」の一言がでず、呼びかけるのが精いっぱいだったのですが、その願いは六年後ちゃんと大人の聖書が読める年代に実現しました。

父によって、お偉いさんの子息子女とお近づきになれるというまことに身勝手な理由でしたけど、キリスト教高校進学の道が開かれ、そこで聖書と出会い、さらに次の年には信仰の道に入っていたのです。毎朝朝礼の代わりに「世の光」が放送で流されていたので、羽鳥明先生のメッセージを何度も耳にしていました。

大学にも父の命令で就職に便利という理由から福祉コースへ進学しました。そこで心理カウンセリングと出会い、卒業までの四年間心のケアを受けることになります。直接導いたのはクリスチャンサークルの先輩でした。さらにサークルを通じて御殿場のリバイバルクルセードに参加し、カウンセリングセミナーを受講した時に、「わたしはカウンセリングで人に仕えたい」と祈りました。

卒業後面接した企業からことごとく断られ続けた時に、たった一つのクリスチャン企業がわたしを受け入れてくれたので、社会人になっても礼拝に参加できていました。一年で解雇されたものの、小谷村の現在のＮＰＯ法人共働学舎を職場の方から紹介されて一八年過ごす中で、赤ちゃんからやり直すような体験を積み重ねながら、さらに心は整えられていきました。ただし入舎と同時に教会から完全に離れたことで、キリスト教会のルールづくめのしがらみからは解放され、このうえない安らぎの時をもてるようになったことは感謝です。

そこで今の主人と出会い結婚したことで、信仰家族の仲間入りをしました。主人の祖母が熱心なクリスチャンだったのです。主人は精神障害当事者です。病状悪化により、もはや共働学舎での生活が困難になったことを機に、二人で松本での生活を志しましたが、「塩尻市に住みませんか」との見知らぬ不動産会社からの一本の電話がきっかけで塩尻市に住むことになります。

塩尻市のあるプロテスタント教会で主人は洗礼を受けました。

街での生活は予想外に厳しくわたしは解雇と転職を繰り返すことになりますが、おかげさまで雑学は増えました。いいかげんくたびれはて、神様に「普通に生きていくのが疲れました。すべてをあなたにゆだねますから、わたしと夫を助けてください」と祈り、ざぶんと主の御手に飛び込んだのです。次の進む方向を模索しつつあちこちのセミナーに参加、最終的に選んだのは心理カウンセリングです。

まず神様に聞かなきゃと心に追い迫るものを感じて、カトリック教会のお御堂へ入っていったのは、松本教会といったらカトリックくらいしか知らなかったから、いつもドアが開いているのを知っていたからです。たった一枚の週報を見つけて手にとった時に、書かれていたみ言

葉は「わたしは誰を遣わそう、・・・はいわたしがここにおります。わたしをおつかわしください」のイザヤ書の一句でした。

ん？　もしかして神様がわたしをどこかへ連れ出そうとしていないか？

「神様、いったいどこへいくんでしょう？」と祈っても返事はなし。その代わり頭に浮かんだのは、アブラハムがみていただろう砂漠の光景です。

うそだろう！　何がおきるかわからないのに？

完全にアブラハムと同化していたわたしはあわわわ……と焦りまくり。

この時「七〇代のアブラハムにできたことが、若いお前にできないわけないだろう！」という神様の思いがびんびんと伝わってきたので、納得できないものの苦し紛れで「はい、わたしをお遣わし下さい」と祈ってその場はおわりました。

祈りの後向かったセミナーでは「発達障害」をテーマで取り上げていて、わたしの生きづらさの原因を知ることになるのですが、大学病院での検査でもはっきりと「アスペルガー傾向が極めて強い」との結果をいただいています。

はてこれからどうやって生きていこうと思っていた時に、新聞で五〇代で診断を受けた当事者の記事を読み、「わたしは当事者のために生きよう」と心に決めて今日にいたっています。

すでにお気づきかもしれませんが、どの部分をとっても次へ進まない流れになっているんです。神様はあらゆるものを駆使してオリジナルストーリーを形作っていかれました。おそらく始まりは両親が出会った時、もしかしたら、いにしえの頃からのアイデアかもしれません。

そうして歩んでいった先にあるのはわたしたちの故郷です。それはまさに「わたしたちの国籍は天にある」「わたしたちはこの世では旅人です」ごとくですよね。

ゴールがはっきりしているので困難が多少あっても進みやすいですよね。苦しみも御計画のうちだと知ると、わたしはその先が見たくなるんです。ここからどんなストーリーが展開していくのでしょう。

「わたしは走る行程を走りぬき、信仰を守り通した。今や主の王冠がわたしを待つばかりです。その実。主の再臨を待ち望む者にさずけてくださるであろう」

まさしくこれですね。

「まず神の国と義を追い求めなさい。そうすればすべてが与えられます。」わたしたち夫婦の生活は一口に言えばこんな感じです。どうしたら神様が輝くのか、知恵を求めていったときに必要が与えられ、さらにいただいたものを上手に活用していく方法も、み言葉から教えていただけるので、お金はないけど日々心豊かな生活があるのです。

わたしだけ特別扱いされているとは思えないので、おそらくみなさんひとりひとりの人生も同じく世界でたったひとつのオリジナルストーリーが設定されているのではないでしょうか。見つけられていないよーという人は、気づかなかっただけの話なので、ちょいと先まで進んでみたらいい。どうせ人生を終わらせるつもりなら、その先の展開を確認してからでもいいのでは？　と思いますし、そうでなければもったいないです。ぜひ見返してみてください。きっと思い当たることがあるはずです。

わたしの願いがあります。様々な理由

でキリスト教会になじめなかった人や、行けなくなってしまったけど信仰はしっかり持っているという人が、安心して憩えるカフェのような場所を作ることです。隣には神の家があって、一人静かに祈りの時を持ったり、聖書を読みあったり、プチ礼拝ができたり、そんな場所があればいい。

そのためにも、私自身が頭でっかちな信仰ではなく、神様の御心に添った歩みができなきゃとも思うんです。

そうして目指すは天にある故郷です。一緒に故郷へ帰ろう！みんなで。「わたしたちの国籍は天にある」ですよ～。

全国キリスト教障害者団体協議会
二〇二四年度　総会報告

日時　二〇二四年七月二日（火）十時
場所　日本基督教団松本筑摩野伝道所

開会の前にみちのくコスモスの会の酒勾節雄さんから、二〇二三年九月一三日に召された小田嶋義幸会長のご葬儀のことが報告された。

一、議長選出　廣田守男キ障協会長

二、点呼

副会長　白井進、会計　石川幸男、監事　滝川英子、みちのくコスモスの会　酒勾節雄（Zoom）、埼玉アーモンドの会　奥田幸平（Zoom）・石川幸男、信州なずなの会　上村聡美・松下篤、兵庫共励会　吉田裕恵・高野国昭（Zoom）、東中国キ障共　宮脇俊昭、広障伝　唐見敏徳（Zoom）、四障伝　野口幸生（Zoom）

七団体一四名中一三名（内 Zoom 五名）出席で総会成立。

三、書記選出　難波幸矢

（当日欠席のため代理：宮脇俊昭）

四、聖書朗読　イザヤ書四三章一～五節

開会祈祷　廣田守男議長

五、議事

（1）二〇二三年度事業報告承認に関する件

廣田議長が別紙に基づき活動報告を行った。会計：石川幸男。会計監査：滝川英子。機関紙「キ障協」編集委員：野口幸生。承認された。

（2）二〇二三年度会計決算報告及び会計監査報告承認に関する件

石川幸男会計役員と滝川英子会計監査から報告を受けた。承認された。

（3）二〇二四年度事業計画（案）承認に関する件

①次期総会開催の件　順番はみちのくコスモスの会、埼玉アーモンドの会となるが両会とも体制が整わないので辞退。兵庫共励会の理事会（役員会）に委ねることとした。

②「キ障協」四六号発行に関する件。

今修養会の発題と総会内容。発題での個人情報も配慮が必要。

③キ障協の略史を発行する件。

キ障協草創期の原稿及び略史を加え、他に必要な資料等は役員会で検討し進める。以上、承認された。

（4）二〇二四年度予算案に関する件

石川幸男会計役員から説明された。「キ障協略史」の発行は予備費から支出する。承認された。会計役員交代に伴いキ障協の振替口座をつくることが石川会計から報告された。

（5）議事録承認に関する件
次回役員会に付託が承認された。
六、閉会祈祷　滝川栄子監事

七、キ障協加盟の各団体報告

みちのくコスモスの会（酒勾節雄さん）
小田嶋義幸さんが召された後、会の体制をどのようにするか話し合ったが結論が出せずにいる。小田嶋さんの存命中に話が出ていた会報「コスモス」の合本を発行する方向で進めている。

アーモンドの会（奥田幸平さん）
「アーモンドの会」は日本基督教団関東教区埼玉地区の委員会として活動している。昨年度は懇談会・委員会をコロナ自粛前の形に戻して行うことが出来た。昨年度懇談会は主題を「教会生活を共にする障害当事者の思い－様々な障害を負う方からの発題を通して－」と題して二名の方に発題していただき、その後四グループ（約一〇名くらいずつ）に分かれて話し合うという恵みの時を持てた。委員研修会では「グループホーム」について研修の時を持った。会のＨＰではキ障協加盟団体の会報紹介をしている。懇談会で発題していただいた障害を負う当事者の方の講演録を掲載した。各団体でＨＰ作成を考えられた時にお手伝いが出来たらとも考えている。他団体との交流も図っている。日本基督教団「『障がい』を考える小委員会」・キ障協・ＮＣＣの「『障害者』と教会問題委員会」などの集会にZoomを通して参加している。これらの交わりを通して情報発信の大切さを感じている。

信州なずなの会（上村聡美さん）
二〇二三年一一月一二日信州なずなの会総会を開催。なずなの会を支援したいと言われる方に多く参加していただき感謝でした。なずなの会としてYouTubeチャンネルの開設をして会員の皆様に総会やイベントの視聴をしていただく事が出来た。その後は二〇二四年度キ障協総会の準備を進めてきた。また、なずなの会は会員数の減少とともに高齢化も進んでいる。会の理念を若い人たちに継承するということが今の課題である。なずなの会総会はリモートも併用して実施した。今後は会の運営もリモートを活用したやり方になるのかなとも考える。これからも障がい者への応援が主に用いられるように出来たらと願う。

ＮＰＯ法人兵庫共励会（高野国昭さん）
Ｎ兵庫共励会は二〇二三年度正会員三五名。二〇二四年六月に開催した総会には二一名が出席した。二〇二三年度はコロナの第五類移行に合わせて一日修養会と淡路へのバス旅行を行った。淡路では人形浄瑠璃を見学した。二三名が参加した。ランチョン（講師を招いての食事会）を二回実施した。共励会創立五〇周年記念誌を発行することが出来た。会員（施設に入所されたり入院されている方）の訪問が出来ずにいる（施設等が断っている）。前理事の古澤輝勝さんの召天で遺贈されたビル（鉄筋コンクリート三階建て）の登記等の手続きが終わった。現在二業者にテナントとして貸している。テナント料を活用していきたい。六月の総会で廣田守男理事長が退任され新しく吉田裕恵さんが第三代目理事長に就任された。兵庫共励会は任意団体からＮＰＯ法人となり、理事長が新しく就任されたことでホップ・ステップ・ジャンプのジャンプをしなくてはならないが、会

員の高齢化、会員数の減少と困難もあるが障碍者福祉のために何かできないか模索しているところである。

東中国キ障共（東中国キリスト者障害を共に学び共に担う会）（宮脇俊昭さん）

東中国キ障共では活動を縮小しているわけではないが、会員の高齢化等もあり参加しにくい状況となっている。昨年一一月に開催した総会では一一名の参加であった。少ないながら総会後の茶話会では有意義な話合いが持てた。鳥取県側では四月二九日に春の日集会として集まりを持った。会員の方の知り合いの小学生が学校の合唱グループに声をかけ九〇名くらいの集会になった。子どもたちとの触れ合いが持てたことは何よりの恵みであった。全体が集まっての活動は出来なかったが会報「シャローム」は充実したものが出来た。会員の皆さんに毎回二～三名の方に寄稿していただきました。また教区内の先生方に文字による説教をいただくことも出来ました。今年は東中国キ障共の創立三五周年という節目でもあり何かをやりたいということになっています。何が出来るか楽しみです。皆様もお祈りください。

広障伝（広島障害者キリスト伝道会）（唐見敏徳さん）

役員会は四回開催できた。しかし全体の活動はいまだにコロナの影響で面会・外出の規制（施設等）があり再開できない状況にある。そのような中で今年度一〇月二〇日（日）に広障伝の修養会開催を東広島市の日本キリスト改革派東広島教会で計画している。機関紙「よろこび」の発行も行う。また今回のキ障協の総会にも参加して皆さんと交わりの時を持ちたかったが、健康上の理由等で出席できず残念な思いです。またお会いできる機会があることを願っています。なお各団体等の出版物等の印刷は竹原市にある「聖恵会」で出来る限り対応します。ご相談ください。

四障伝（四国障害者キリスト伝道会）（野口幸生さん）

修養会をメイン活動として実施している。高知地区会活動は施設入所者の外出がコロナで制限されて休会。修養会は三時間の短縮版をこの二年間も実施。今年は一〇月一四日～一五日一泊修養会を再開。講師は日本基督教団広島西部教会の山根眞三牧師。会長が丸木道弘さんから明石公子さんとなった。会計も交代予定。アイデアを出しながら四障伝設立時のことを思い、祈りつつ歩んでいこうと思う。会報の発行回数を戻したい。会報は「埼玉アーモンドの会」のＨＰでの紹介をご覧ください。

二〇二五年度キ障協総会・修養会のご案内

キ障協の各団体に所属しておられます皆様、お元気にお過ごしでしょうか？

二〇二〇年コロナ禍で中断した総会・修養会も二三年七月に対面で四国の松山で、昨年は信州なずなの会の担当でオンラインを含め松本市で開催し、今年は兵庫共励会が担当し神戸のホテルでオンラインを含め開催することになりました。

各加盟団体会員におかれましても是非ご参加くださるようご案内申し上げます。

日程　七月七日(月)～八日(火)
会場及び宿泊
新幹線新神戸駅隣
ANAクラウンプラザホテル神戸
九階会議室
住所 神戸市中央区北野町一丁目
TEL 〇七八―二九一―一一四六
参加費用：全日参加　一万二千円
（宿泊費＆参加費＆夕食代含）
①部分参加（参加費 夕食代含）五千円
②部分参加（夕食なし）二千円
締め切り：五月末日（期日厳守）
※お申込みいただいた方に、正式なプログラム及び参加方法詳細を送付します。送付希望先をお知らせ下さい（Zoom参加の方はメールアドレスを記入下さい）。

プログラム
一日目
一三時～一四時　受付
一四時～一五分　オリエンテーション
一四時一五～四五分　開会礼拝
一五時～一七時　講演・質疑応答
講師：岩村義雄先生、
「この最も小さな者の一人にしたのは、すなわち私にした」（マタイ二五章四〇節）
一七時　記念写真
一七時三〇～一九時三〇分夕食・交流会
二日目
九時～　所属団体報告会・キ障協総会
十一時三〇～十二時　閉会礼拝（終了）
実施団体 特定非営利活動法人兵庫共励会

詳細にわたるご案内は、年度明けの四月に入って兵庫共励会より、加盟各団体に送られます。加盟団体を通じてお申し込みください。各団体の皆様と再会の機会です。是非とも多数ご参加ください。

尚、加盟各団体は二〇二四年度の団体活動報告をまとめて文書にし、総会でご報告下さい。よろしくお願い致します。

講師：岩村義雄氏プロフィール
9・11テロ（二〇〇一年）以降、難民支援、被災者に寄り添う「ボランティア道」や「田・山・湾の復活」を展開。宮城県石巻市渡波（わたのは）で、東日本大震災以降、園児たちと一四回にわたる田植え、稲刈りのコメづくり。熊本県球磨（くま）川（熊本豪雨）以降四回園児たちとコメづくり。独居の高齢者寄り添いのために月に一度、東北、九州で仕えている。二〇一四年から東遊園地（神戸市役所隣）で炊き出し、海外ではネパール、シリア、北朝鮮など一〇ヵ国以上で孤児の施設に取り組んでいる。（社）神戸国際支援機構会長、「みんなで『死』を考える会」会長、エラスムス平和研究所所長、「阪神宗教者の会」会長、「カヨ子基金」会長、「憲法九条をノーベル平和賞に推す神戸の会」総主事、神戸新聞会館講師。